

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531116

研究課題名(和文) 大学入試にみる能力観とエリート像 - 日・米・仏の比較から -

研究課題名(英文) Abilities Tested in University Entrance Examinations and Types of Elites:  
Comparisons of Japan, the United States and France

研究代表者

渡邊 雅子 (Watanabe, Masako)

名古屋大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：20312209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日・米・仏の大学入試の問題分析とその準備教育の調査を通して、各国の試験ではいかなる能力を測定しているのか、それは社会で求められる能力といかに関連するのかを能力観のモデル化を試みて明らかにした。モデル化では、知識の性質(「経験的」対「学問的」)と教育目標(「価値的」対「技術的」)の2つの指標を組み合わせる事により、4タイプの能力観を規定した。アメリカのSATは効果的な推論力を(応用型)、日本のセンター試験は内的共同体を作り上げるための共感力を(共同体型)、フランスのバカロレアは、弁証法を使い新たな前提条件を創り上げる力(政治型)を測っていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study compared types of abilities tested in university entrance examinations in Japan, United States and France through the analysis of questions of exams and preparatory education in high schools. Based on the analysis, a typology with types of knowledge (experiential versus academic) and objective (instrumental versus value) as indices was proposed. Three types of abilities were extracted from the typology: communal, generic and political. Japanese National Center Test examines the ability to infer human emotions, whereas the American SAT measures effective reasoning for versatile application. French baccalaureate tests the mastery of dialectical procedure for innovation. Entrance examinations reveal the types of abilities and attitude each society values and that in turn elucidates necessary conditions for the elites in each society.

研究分野：教育社会学

キーワード：大学入試 能力観 エリート像 SAT センター試験 バカロレア 比較教育

## 1. 研究開始当初の背景

大学入学の選抜方法は、国や文化圏により試験の内容・形式・制度・理念に大きな違いが見られる。入試のありかた、特にいかなる能力をどのような方法で測るのかは高等教育のみならず、初等・中等教育を含む教育課程や教授法、教育目標など教育システム全般に多大な影響を与えており、それだけに入試の特徴を明らかにすることは、教育全般の特質を明らかにする鍵となる。さらに入試が多くの国々で大人になるための「通過儀礼」と捉えられていることから、その分析から社会で求められる能力や知識の型、望まれる人間像を探ることも可能だと考えられる。

過去の大学入試研究においては、世界規模の比較からその類型化が試みられてはいるが（中島 1986 など）主として制度面の違いに焦点が当てられ、また高等教育制度の一環として受け入れ側である大学がいかなる資質・能力・属性を評価するかに重点が置かれてきた。しかしながら入試はその先の高等教育と関係するばかりでなく、初等・中等教育、そして社会で求められる能力とも密接に関係し、それらとの関連から比較を行う視点が重要である。

申請者は過去 20 年にわたり、日本とアメリカの初等・中等教育における思考とその表現法の比較研究を行い（渡辺 2004）、2002 年からはフランスを加えた 3 ヶ国の比較調査を行っている（渡辺 2007）。名古屋市とニューヨーク市郊外、リヨン市での継続的な学校観察調査とともに、2008 年からはフランスのバカロレアの試験問題分析と高校の準備教育の観察調査に着手し、2010 年 6 月には、フランス国民教育省と日本の文部科学省からの要請で国際バカロレアオプション試験の招聘視学官をパリとリヨンで務める機会を得た。

これらの調査研究から、「入試」と教育・社会の密接な関わりを痛感するとともに、フランスの論文と口述試験で評価される知識の形、つまり情報の提示方法の違いに驚愕した。フランスの初

等・中等カリキュラムは、バカロレア取得を目指して発展段階的に組まれており、かつ論文を書く徹底的な訓練が高校最後の 2 年間で行われるため、高等教育を受けるための基本的な技術と知識習得が公教育で行われるのが特徴的である。すべてのカリキュラムは、文化的共通知識を材料に、弁証法で考え、書き・語るために生まれ、それは高等教育のみならず、官吏登用試験にまで連なる教育と社会を繋ぐ能力の基礎となり、伝統継承とエリート養成の根幹を成している。日本で受験勉強に多大な労力と時間が注ぎ込まれるわりに、その成果が高等教育の基礎となりにくく、結果として入試を通して中等教育と高等教育が断絶している日本とは対照的である。しかも弁証法という思考表現法の「型」を身につけ、古典を「暗記」することは、批判する力を身につける（フランスの高校では「反抗（résistance）することを教える」といわれる）ことと矛盾しない。弁証法という「型」の中にすでに現在あるものから新たな組み合わせを考える仕掛けがあるからである。

日本ではアメリカをモデルに様々な教育改革が試みられ、日本のセンター試験もアメリカの SAT をモデルに作られた。しかし試験の形式は似ていても、その内容・目的・測られる能力は日米でも大きく異なっている。日本、アメリカにヨーロッパを加えた入試をその歴史的形成過程と社会とのつながりをも視野に入れてモデル化を試みることは、少子化や大学間の国際競争といった変容する社会状況の中で、日本の入試のあり方の新たな可能性を探る基礎研究になると考える。

## 2. 研究の目的

以上のような背景から、本研究プロジェクトでは 3 つの切り口から大学入試を分析した。まず初等教育の比較研究で培った方法を踏襲しつつ、日本・アメリカ・フランスの大学入学試験問題（過去 5 年を目安にする）を「思考表現法」と能力評価の観点から分析し、3 ヶ国ではいかなる知識とその提示方法を求め、それはいかなる能力につな

がるのかを明らかにし、また入試の形態や制度から、入試の目的と理念を明らかにした。次に、入試の準備・訓練はいかに行われているかを主に中等教育の現場と公教育以外の機関の観察とインタビューにより調査した。そして3つ目の切り口として、現行入試の歴史的経緯を文献調査し、入試の成立と変化の際には、いかなる教育的、あるいは政治・経済・社会的な力が働いたのか、何が理念となり誰が(あるいはどの機関が)中心的役割を果たしたのかを明らかにした。知識の型と能力観形成への社会の影響、その相互作用と要因を同定した。これらはそれぞれが独立した研究として論文にまとめることができるが、3つの切り口を統合することにより、入試を核とした思考表現法と教育、社会の構造の類型化を試みるのがプロジェクトの最終目標である。類型化においては、思考法、教育制度・実践、能力観とリーダーシップの特徴を抽出し、認知(ミクロレベル)から、組織(中間レベル)、組織間の連携(マクロレベル)を横断するモデルを構築したい。申請者の過去20年の比較研究・調査の蓄積を踏まえ、入試の視点から新たに整理・統合することにより、入試を考える際の「枠組み」が提供できる研究を目指したい。

入試は一国の中でも多様な形式があるが、多数の学生が共通に受験する日本のセンター試験、アメリカのSAT(Scholastic Assessment Test)、フランスの普通バカロレアを取り上げ、それらの試験問題の中でも違いが顕著に表れる国語と歴史の問題を分析対象とする。質問の形式とその答え方の比較から、どのような知識をいかなる形に編集して表現・提示するかを明らかにして、類型化を行う。試験の過去問題と攻略法が記された文献調査とともに、計量的な分析も併せて行いたい。日本型入試の再考が迫られている折、アメリカのSAT試験に表れる効率を重んじる分析力は、近年PISA型と呼ばれる文化的文脈を極力排除した知識の型とそれを扱う能力に通じるところがある

が、そのみをモデルにして良いのだろうか。日本で「欧米」と一括りにされる情報や研究成果は、実はアメリカについて述べていることが多いが、ヨーロッパ諸国を視野に入れれば、むしろアメリカは大変特殊な例であることがわかる。フランスを研究対象に入れて3点比較を行うことにより、アメリカモデルの相対化が可能になるだろう。既存の世界規模の入試類型では、アメリカと日本が同じ型に分類されているが(中島 1986)、入試問題の分析を行えばそこで問われている知識・能力や入試の目的・理念は大きく異なることがわかる。

また入試問題分析とその準備教育・訓練、さらには初等教育との関連までを視野に入れ、公教育という「全体」の中の「部分」として入試を分析する視点はほとんど取られてこなかった。そこにいかなる関連と断絶があるのかを比較から捉えることにより、入試から教育システムの類型化を行うことも本研究の特徴である。さらに歴史的経緯を付け加えることで、大学入試をひとつの「文化」と捉え、社会の中でどのような機能を果たしているかを考察する。こうした複数の視点からの分析により、入試を通して立体的に教育と社会を捉え、新たな知見を積み上げたい。

[参考・引用文献]

College Board, 2009, *The Official SAT Study Guide (second edition)*, New York: McMillan.

Dauvin, Sylvie and Jacques Dauvin, 2006, *Annabac Sujets et Corrigé Français*, Paris: Hatier.

稲原彰, 2010, 『センター試験傾向と対策 国語』旺文社。

レマン・ニコラス, 2001, 『ビッグテスト—アメリカの大学入試制度』久野温穂訳 早川書房。

中島直忠, 1986, 『世界の大学入試』時事通信社。

渡辺雅子, 2004, 『納得の構造—日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社。

\_\_\_\_\_, 2007, 「日米仏の国語教育を読み解く—読み書きの歴史社会的考察」『日本研究』35 角

川学芸出版, pp.573-619.

### 3. 研究の方法

#### (1) 大学入学試験問題の分析

アメリカのSAT、日本のセンター試験、フランスの普通バカロレア(L, ES, S)における、国語と歴史(地歴)の過去問題集および攻略本(日本の『傾向と対策』にあたる本・雑誌)を過去5年に遡って収集し、質問形式のパターンと問題数、

求められる情報・知識の質(一次情報なのか加工の必要な二次情報なのか、推論の形態等)、

情報・知識の表現法の3点に注目して比較分析を行う。の表現法は、SAT1におけるアメリカの「エッセイ(小論文)」、日本のセンター試験における「説明文」と二次試験の「小論文」、バカロレアにおける「フランス式論文法(Dissertation)」を対象にする。各国の「書く」試験に頻用される論文法の構造と論理(ロジック)を明らかにすることにより、暗記された知識はいかに納得されやすい形に加工されるのかを比較する。入試問題とともに「書く」表現様式を比較対象にすることにより、入試によって測られる技術とその背後にある能力観の推論が可能になる。

#### (2) 入学準備教育・訓練の実態調査

各国の準備教育・訓練を網羅的に調査することは不可能であるが、比較対象として各国の主流文化を代表すると考えられる社会・経済的に良いとされている地域の公立学校ないしは「伝統校」を選択し、実態調査を行う。教師へのインタビュー及び、授業観察、カリキュラムの比較を行う。

#### (3) 歴史的推移

文献調査により、現行の大学入試の創設および変遷の局面で、教育的な議論とともにいかなる政治・経済・社会的な要因が働いたか、誰が決定に大きな影響力を及ぼしたのか、何が変化のきっかけになったのか、どう変わってきたのかを明らかにし、3ヶ国の類似点と相違点を整理する。フランスの場合は、バカロレアにおける論文様式の変化と発展の歴史も併せて読み込む。

### 4. 研究成果

4年間の調査期間中、3カ国の試験問題の分析と準備教育の授業観察及び教師へのインタビューを行い、併せて3カ国の試験の歴史的背景をまとめ、これらの結果をもとに3カ国の試験で測られる能力をモデル化した。能力観の類型は、英語国際ジャーナルComparative Sociologyの14巻に掲載された他(2015年5月発行)国内のジャーナル誌にも掲載され、国内外の学会でも報告を行った。以下に調査の知見を記す。

#### 1) 試験問題の分析と能力観のモデル化

3カ国の文学の過去の試験問題の分析から、以下のような能力観の分析モデルを提案した。いかなる知識(体験的知識対体系的学問知)と教育目標(価値的目標対技術目標)が想定されているかの2つセットの仮定から4つのタイプの能力観を規定した。アメリカのSATは日常生活にも応用可能な効果的な推論力を(「応用型」)、日本のセンター試験は場面場面で内的共同体を瞬時に作り上げるための共感力を(「共同体型」)、フランスのバカロレアは、弁証法を使い新たな前提条件を創り上げる力(「政治型」)を測っていることが明らかになった。具体的にはSATでは、多様なジャンルの文学作品を短時間に大量に理解させるため、ジャンルの知識を問うのに対して、センター試験は主人公の気持ちを問い、バカロレアでは議論の材料や結論は受験者が決められる自由度が高いのに反して論文の形式(=手続き)には従う事が求められていた。いずれの能力も、各国の社会で重視されている能力のエッセンスを形成することが文献によって確認された。

#### 2) 高校の準備教育調査

フランスのバカロレアの準備教育を通して養われるのは、知識を伝統的な弁証法の形式に落とし込むことによって、考え方の「型」を修得させるとともに、個別具体的な情報をまとめあげて結論や知見に導く、つまり説得力ある大きな構図を描く方法の体得である。この方法論は、哲学や歴

史、文学などの確実な引用無しには適用不可能であるので、共通財産としての基礎知識の暗記とともにそれら知識を自在に組み合わせる論を展開する能力と、「何を論点とするのか」を「問い」の形にして浮かび上がらせる発問力が徹底的に訓練される。同時に世界の複雑性を受け入れ、矛盾を包括しつつ動的に考える思考法は初等教育から積み上げられた文学の知識と書く技術の統合として文学のバカロレア試験に結実している。

アメリカの調査では入試準備は、知識内容よりもエッセイを書く訓練に重点が置かれていることが教科を横断した特徴として明らかになった。分析的・説得的 (analytical and persuasive) エッセイを書く指導と練習・試験が行われており、その量は文学と社会科学を合わせると年間で 20 を超えるエッセイの課題が出されていた。より示唆に富むのは、こうした分析的なエッセイに加えて、文学の授業では個人的な体験や視点を重視したエッセイ (personal writing) の指導と訓練が行われていたことである。分析・説得のエッセイは、日本のセンター試験に相当する SAT 1 の書く試験で頻用されるのに対して、パーソナル・エッセイは、個々の大学へ出願する際に SAT の点数や成績とともに大学に送られ、特に有名私立大学の入学審査で重要な役割を果たすと言われている。パーソナル・エッセイではいかに自己の体験に依拠しつつ表現と視点に独自性を発揮させられるかが重要で、教師と生徒の信頼関係が無いとこのジャンルのエッセイの指導は難しく、生徒の社会資本と文化資本の多・少が指導にも影響を及ぼす事が明らかになった。アメリカにおける文化資本の中身についてはヨーロッパと比べこれまで明確にされてこなかったが、フランスに代表されるヨーロッパとは異なる書くジャンルの訓練は、能力観のモデル化の指標 (体験的な知識を重視するのか、学問知なのか) ととも一致しており、この点については今後も調査を続けたい。

### 3) 歴史的推移と総括

バカロレア試験で最も頻用される論文形式であり「フランス式論文」とも呼ばれる 'dissertation' は、フランス革命後の新しいものの考え方とその表現法を模索する中から革命後 100 年をかけて作り上げられたものである。フランス式論文においては、生徒が主体的に主題の異なる側面を識別して価値付けを行い、推論を極限まで押し進めて結論を導く。伝統的な修辞学の技法はここでは全く役に立たず、文学はスタイル模倣のための材料ではなく、テキスト自体を論じる批判的側面を持つようになった。しかしながら、基本構造となる弁証法は、ギリシャ・ローマの哲学者たちが時間をかけて練り上げ、中世のスコラ学にも受け継がれた緻密な推論の技法であり、思考の型でもあることから、フランス式論文が体現するのは、古典の再生ではなく歴史的遺産を内包しつつ新たなステージに上がったと見るべきであろう。生き馬の目を抜くグローバリズムと高度情報化社会にあっては、その能力養成にも、作成そのものにも多大な労力と時間を要するフランス式論文はいかにも非効率的で不利である。弁証法の「正・反・合」の「反」と「合」を切り捨てたアメリカのエッセイは、視点をひとつに絞り、思考の効率化を図る事によって新しい時代のルールを形成してきた。しかしながら、フランスがその存在感を持ち続けられるのは、それとは対極の位置に思考表現法と価値を置いた事にある。

ポストモダンと呼ばれる現代においては、問いは与えられるものではなく、自ら創り出すものであり、多様な視点からより包括的な視点を獲得する思考法こそが、単一の視点とルールを強要するグローバリズムの対抗軸となり得る。受験する側にも採点する側にも多大な労力を強いるバカロレア試験であるが、その価値をフランス社会が認めるからこそ、幾度となく起こる改革の議論の中で、その形を変えずに存続していると考えられる。それはまた、バカロレアをナポレオン時代から試行錯誤の中で自らの価値観と伝統に基づき創り

上げて来た自負によるところも大きい。この試験を変える事は、社会を変える事と同義なのである。(詳細は下記「ディセルタシオンとエッセイ論文構造と思考法の仏米比較-」を参照)

これらの調査・分析からは以下のような示唆が得られる。日本のセンター試験は SAT をもとに作られながらも独自の進化を遂げており、文学(国語)の問題比較で明らかにされたように暗記力のみを測っているのではなく、極めて高度な認知力を必要とする能力を求めている。こうした質的な違いは、比較によって初めて明らかになるものであり、求められる能力は初等教育から積み上げられ長い時間をかけて醸成されるものである。よって文化・社会的な調査知見が入試改革の議論には不可欠である。

#### 5. 主な発表論文等(研究代表者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. 渡邊雅子, 2012, 「ディセルタシオンとエッセイ論文構造と思考法の米仏比較」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第58巻第2号, pp.1-15
2. 渡邊雅子, 2014, 「国際バカロレアにみるグローバル時代の教育内容と社会化」『教育学研究』第81巻第2号: 176-186. (査読有り)
3. Masako Ema WATANABE, 2015, "Typology of Abilities Tested in University Entrance Examinations: Comparisons of the United States, Japan, Iran, and France." *Comparative Sociology* 14:79-101. (査読有り)

[学会発表] (計6件)

1. Masako Ema WATANABE, 2011, "Styles of Reasoning in Japan, the United States, and France: Logical, Causal, and Emotional Framing in Three Countries." Regional Conference of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Istanbul (July 3, 2011) (査読付国際学会)

2. 渡邊雅子, 2011, 「フランスの公共性と教育実践—伝統文化の継承と市民の育成」(課題研究「カリキュラムにおける公共性のポリテイクス」)日本カリキュラム学会第22回大会北海道大学(2011年7月16日).
3. 渡邊雅子, 2012, 「研究者の領域、実践者の領域—研究者に何ができるか(日米仏の事例から)」(シンポジウム「教育実践の場へいかにアプローチするか」)日本教師学会第13回大会 早稲田大学(2012年3月4日).
4. 渡邊雅子, 2012, 「文化と思考法を可視化する—社会学のアプローチから」(課題研究「国語教育研究手法の開発(2)—社会学・文化人類学におけるフィールド研究手法との交流」全国大学国語教育学会第123回富山大会, 富山大学(2012年10月28日).
5. Masako Ema WATANABE, 2014, "Entrance Examinations As a Tool for Socialization and System Maintenance: Comparisons between the United States, Japan, and France." XVIII ISA World Congress of Sociology, Pacifico Yokohama, July 16<sup>th</sup>, 2014. (査読付き国際学会)
6. Masako Ema WATANABE, 2014, "Globalization, Enculturation, and Acculturation in Education: Comparisons of Three Types of Baccalaureates, International Baccalaureate (IB), French Baccalauréate (Le Bac) and Option International Baccalaureate (OIB)." 日本教育社会学会第66回大会(英語特設部会), 松山大学, 2014年9月13日).

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 雅子 (WATANABE, Masako)  
名古屋大学・教育発達科学研究科・教授  
研究者番号: 20312209

(2) 研究分担者 なし